



鏡花全集 卷一 第二回配本（全二十九卷）

定價二千二百圓

昭和四十八年十一月二日 發行

著 者 泉 鏡 太 郎

發行者 岩 波 雄 二 郎

發行所 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩 波 書 店

印刷 三陽社 製本 松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

冠彌左衛門	(明治二十六年五月).....	一
活人形	(明治二十六年五月).....	一五
金時計	(明治二十六年六月).....	二九
大和心	(明治二十七年八月).....	三五
豫備兵	(明治二十七年十月).....	三五
海戦の餘波	(明治二十七年十一月).....	三七
譬喻談	(明治二十七年十一月).....	三九
義血俠血	(明治二十七年十一月).....	四五
亂菊	(明治二十七年十一月).....	四九

鬼の角	(明治二十七年十二月).....	五二
取舵	(明治二十八年一月).....	六二七
聾の一心	(明治二十八年一月).....	六三五
秘妾傳	(明治二十八年三月).....	六五七
夜行巡查	(明治二十八年四月).....	六九三
泉鏡花年譜		一
泉鏡花作品年表		一

冠彌左衛門

星月夜鎌倉長谷の片傍、權五郎景政が社の境内に、小喧しき力聲は、極樂寺近邊の壯佼ども、腕強を擡りて十五六人、いづれ劣らぬ暴くれ男、ぐるりと輪になる眞中には、大小の石二ツ。是や昔景政が、手玉に取りしと言傳ふる、力石を扛むとて、或は肌脱赤條々、繩の腹巻、藤蔓の顚卷などに氣競けり。江島參詣の歸途か、五人ばかりの一群あり、客と見ゆる色白男、雪の下の藝者と肩擦並べ、取巻には雛妓、茶屋女、飛んだ荷物は食酔うたる野幫間の亂拍手、哄と噪動いて來りしが、こりや面白しと立寄りて、力試を見物す。

鼻に汗かく血氣盛りは、女の前の見えを飾り、天晴力鼎を扛げて、腕に思ひを懸けさせむ、と先づ一番が登瀧の三九郎、三十五貫の太の方に、諸手を懸けて、うんとこな。遠吠のやうなる聲を揚げて、押せども曳けども埒明かず。代りて出たる猿松は、汗に茹つて眞赤になれど、膝より揚らず引込めば、ちえゝと悔しがりて三番に、目白の胴六同じく駄目なり。

見物の女可笑さに腹を抱へて、行かむとするを、旦那様もうちつと、と雛妓が留め、まだ中入

前まへ之これからが眞打しんうち、若い衆しゅたの頼たのみます、と幫間たいこが囃はやせば、若連中わかれんぢうやつきとなり、それ覺おぼえのあるのがちやつと出でて、二つも一所いっしょに扛かしてくれ、權五郎組ごんごろうぐみの沽券こけんが下さがる、貴様きさまやツつけろ、まア〜汝われが出でい、と猶豫ためらふ處ところへ、一人ひとりが呼よんで來た、之これは見るから強つよさうな大だいの男をとこ、向顚むかうはん卷まきにてついで出でる。

壯佼わかもども力身りきみ立ち、鐵公來てつこうきたか難有ありがてえ、女郎今めらういまに見みろ、驚おどろくな。しつかり〜、と聲援せいえんすれば、件くだんの強者つものりやう兩の手てを丁ちやうと拍うち、えいやツと聲こゑの下した、苦くも無なく胸むねにて支たへたり。

幫間たいこ扇あふぎを颯さつと開ひらき、喝采やんや〜。日本一にっぽんいちの強かうの者もの……が、おや目を白しろくした、それ黒くろくした。舌したを吐はくぞ、切齒はがみをするわ。と連しきりに嘲おひやれば、癩癩かんしやくいちじ一時いときに込あみ上げて、鐵公てつこうは死力しりよくを出いだし、一息入ひといきい

れて腰こしを捻ひねり、うツといきむ拍子ひやしの惡わるさ！ 思おもはず尾籠びろうを振舞ふるまひければ、さらでも堪たらぬ藝妓げいぎ、雛妓おひやく、客きやくも下女きんなんも幫間たいこもろとも、腹はらを抱かへて、死しぬる死しぬると笑わらひけり。

暫しばらくして四邊あたりを見みれば、何いつつの間まにやら、一人行ひとりゆき二人行ふたりゆき、夕日ゆふひの影かげは此方こちとち等らばかり、機はすの惡わるさに遁にげたと見みえる。入いらぬ腕立うでだて笑止せうし々々と、假聲こゐまじりにさゞめきて、さあ行きましよと退の際に、姉様ねえさま如何程重量なんにものだらう、と雛妓おひやくが要いらぬ穿鑿せんさく、力石ちからいしに手てを懸かけたるを、社やしろの裏うらの森蔭もりかげに二つ雙ふたぶ梟ふくろの眼まなこ、様子やうすを覗うかがふ放屁ほうひの鐵てつ、十五六人にんしろ後あとに立ちて、それ出でる。とばら〜。

あれと遁にげる雛妓おひやくの小腕こぶりな、鐵てつが捻ひねぢて抱竦だいきくむれば、一足先ひとあしの四人連よにんづれ、これはと驚おどろく間ひまも無なく、

大勢にて押取巻き、やい汝、力石に手を懸けたな。誰でも来い、此石に指でもさした奴輩は、赤子でも病人でも、持たさにや置かぬ村の定法。さ、上げろ、持つて見ろと力任せに小突廻され、雛妓は哭いて詫れども無法者は肯入れず。これさ野暮なことを、よしやれ。と止むる幫間。汝が一體氣に喰はぬ。と腦天ばかりと啖はされ、飛出さぬかと目玉を押へてよろめけば、咄嗟と騒ぐ女伴。野郎にも遺恨がある、袋叩きにして了へ。女輩は擔げ、念佛だ。——あれ人殺、助けおくれ。

そりやこそ喧嘩と人の山。女子供を、あれ非道い奴輩だ、弱い方に加勢をしてはやりたけれど、對手は権五郎組の若い者、之にはあやまると、誰も彼も手を束ねて高見の見物。

表が騒がし。何事、と二階の簾を巻き上げて、欄干に半身を現したるは、嬋娟たる嬢子と見紛ふばかりの少年なり。高妙寺是空上人が祕藏の美童、年取つて十八歳、其匂やかなる姿には、花も色なく見えにけり。

落花狼藉の光景を、見るよりふつと内に入りしが、あれお危ない皆さん止めて、と媚めかしき女の金切聲、見れば縋りて止むる女を振切り、格子戸がらり、飛出す少年、足袋跣足のまゝ、一文字！ 暴れものの群がる中へ、容赦も無く猛然と躍込めば、やあ小癩な二才、小指で弾け、と總がかりで哄と寄する時、一足二足身を退きて、ひらりと飛んで、石燈籠の笠石にすつくと立つ、

不思議の早業。さすが前髪は汗に濡れ、髪びんの亂れを搔拂かきほらひ、ほと一息ひといきして、働はたらき自由じゆうならぬ兩りやうの袂たもとを結むすばむとする足下あしもとへ、ふわり、丸まるげて投げたる藝妓げいしやの腰帶こしおび、咄嗟とつさに綾取あやどる深紅しんくの袴たすき、眞白ましろき腕かひなに磨さしきて、さあ来い、靈山りやうぜんの卵う之助のすけだ。

二

弱よわい者もの虐めいびの疫病えびみの神かみども、憎にくしと思おもへる見物けんぶつは、此立役このたちやくに手てを拍うちて、名なばかり聞ききたる高麗屋かうらいやと、どつと崩くづる、ばかりなり。

卵う之助のすけ身輕みがるになつて、さあ来いこと突立つたてば、飛とんで火ひに入る夏なつの蟲むし、それ捻ひねれ、合點がつてんだ。と棒ぼうちぎり、丸太薪まるたきなど亂みだる、間に、早瀬はやせを潛ひそむ若鮎わかあゆの、小太刀こたちつかうて働はたらくを、二階にかいから覗のぞき、門口かどに飛出とひだし、階はしこ子すわに坐すわりて眼まなこを塞ふさぎ、南無觀音なむくわんのんさま様やうす子すを見みてはあれくと、くるく舞まひして氣きを揉もむは、餅屋もちやの娘小萩むすめこはぎといふ可愛かはいらしき女子をんななり。

お若衆わかしうしつかり負まけまいぞ、と口々くちぐに加勢かせいして、石いしを投げ砂すなを飛とばして氣競きほひ懸かれば、しどろに亂みだる、五郎組ごろうぐみ、素早すばやき見物けんぶつ七八人にん、隙すきを見て駈かけけ出し、小ちひさくなりて踞うづくまる藝者げいしやの群むれを取巻とりまきて、手足てあし纏まとひは働はたらきの邪魔じゃまになる、え、禮れいどころかい、それ逃にげろ。

逃にげてののち後は喧嘩けんかに張はり無く、一人ひとりの若衆わかしうに駈惱かけなやまされ、又仕返またししの折をりあらむ、皆みなが一ひとまづ退ひい

た退いた、と臆病風に誘はれたる五郎組、濱邊をさして總崩れ、見物の中へ紛れ籠めば、石を投

げたる彌次馬連中、讐さるゝよと打騒ぎ、傍杖喰ふな、と一同に、猫も杓子もちりくばらく。

汚なし返せと言ひはせしが、素より好まぬ達引ゆゑ、卯之助好き程に追ひ棄てて、悠然と引返

せば、四邊は既に靜になるを、見澄して小萩駈け出で、日本疇業お勇しや。まあお怪我は無きか、

おせつなかる、はや家へ来てお休息なされ。あれまあお召が大層に、と染小袖の後前、塵埃はた

いて介抱すれば、好いわ、介意な、何とも無し。ちと手拭を貸してたまはれ。汗になつた、と帶

にはさめる手拭借りて、衣紋を寛げ、身體を拭ひ、歸山も急げど喉渴きぬ、お茶一つ雑作に成ら

む。さあお出。と連立てば、小萩が母親出迎へ、煽ぎたてて手柄を賞め、ともに無事をぞ祝しけ

る。

沖の暗いに白帆も見えず入相過ぎて宵闇の、時雨模様様の秋の空。往來途絶ゆる海岸通、一際黒

きは松並木、仄かに白きは流の水、四邊寂寥とする折しも、長谷の方より二人の琵琶、一散に駈

附けて、閻魔川の下流なる、海岸橋にて立止まりつ。

這個の歸途は慥に此道、不覺を取つた報讐に、天の與へか、眞の暗夜。いつかな鞍馬の御曹子

も黒白が見えねば盲目同然。寢鳥を刺すに譯は無え。琵琶合圖に後から、鐵、猿、脱心な、合點

だ。と寢刃合せたる大刀の、鯉口ぶつり。忍べ。忍べ！

山果庭に落ちて朝三の食秋風に飽き、柴火爐に宿して夜薄の衣寒氣を凌ぐ、と低聲に吟じつゝ、蛇の目の傘、高足駄、海岸橋に來懸る頃、村雨颯と降出しぬ。

來たぞ、來たぞと二人が頷き、大刀の鞘拂ひしてそと寄りつゝ、やと切り下す劍の牙は、さても見事や傘の轆轤を斜に研つたりけり。む、稻妻、時候ならぬ。と、不敵の卯之助怖るゝ色無く、悠々として行かむとするを、二才待て。と前後を塞ぎて仁王立。乳の香の失せぬ小童を對手にするも大人氣無し、と控目にした手落から、思はぬ不覺を取つたる無念さ、遺恨を返しに待つて居た。小峰の猿松。鍛の鐵吉。命はもらうた、觀念と飛びかゝるを、靈山外して空を切らせ、開く處へ鐵が附入り、足を拂へばさしつたり、欄干に手を突羽根や、擬寶珠を飛ぶ牛若丸。下り違ひさま丁と蹴れば、わッ！深みへざんぶりこ。残る一人は南無三寶、命が種と逃げ失せけり。

來懸る提灯は猿の傳次、怪しき水音と窺ふを、すれ違つて飛出す奴、曲者やい。と引摺めば、聞馴れた聲——親分か。いかにも傳次、手前は誰だ。面目も無い猿松で。なに猿松。と放し遣り、水喰うたは何者だ。ありや鐵吉。といふ譯は。内端喧嘩を仕をつたか。いんや對手は靈山卯之助。何、而して何とした。力持から喧嘩を始め、十四五人で見事に負け、親分に合す顔が無ければ、意趣を返さうと鐵と此猿、卯之助が歸りを待伏して、ばつさりやつたは傘で、主は手利の足蹴にされて、鐵は川へ落された。危ない所。と身顫ひすれば、お、卯之助殿出來された。と傳次は獨り

悦に入る。猿松呆れて、親分敵を取つては下さるまいか。何の報讐。さほどの手並と聞くからは、今夜にも名乗り合ひ……それよと言ひ捨て行く影を、茫然見送る後から、唐突にわツといふ。あツと驚き振向けば、漸々上つて來たる土左衛門、わな／＼震へて、え、寒いぞ／＼。

三

驚が棲む、靈山高妙寺の是空和尚、博學の譽高く、道德の光明かに、遠近渴仰の聖なり。されば迷雲晴れ渡りて、伽藍の棟は神々しく、日想觀の業卒へて、三十の山徒緘黙の眼を塞ぎ、打たねば鐘の音も無く、寂寞森と初夜更けたり。

海岸橋を切り抜けて、走り歸れる美少年、閉出されて途方に暮れ、生憎本坊隔りたれば、叩いても駄目なこと。さりとて外泊は寺法の禁制、何とか思案は……おつと有り。左へ曲つて杉垣傳ひ、切戸を押せば卵塔場。何時も戸鎖ぬ太平は、世に無き人の住家かな。何の大姉居士達のお宿の前を過行けば、星の灯落葉の褥。時に雨霽れ雲斷れて、青照山の叢に月の出汐の最凄く、松風颯と梢を鳴し、淨土を呼ばふ聲すなり。千草に啣く蟲の音は、苔の下なる躰かや、卒塔婆を照す月影の碎けて落つる葉末の露は誰が亡魂ぞ哀なる。不圖眼に入りたる石塔一基、四邊は尾花の茂り合ひて、いと／＼なほ荒れ果てたるに、これにのみ花を手向け、闕伽さへ清く備へたり。

茂林を潛る月影に、讀めば二行の文字ありて、銳心院儉俠居士、貞松院妙烈大姉と刻まれたり。無縁の精靈頓生菩提、はからず爰に止まりしも何かの縁と回向して、つと立去るを止むるものは、仔細あつて後を跟け、先より動靜を窺ひたる、權五郎組の立物、猿の傳次。呼ばるゝは我事かと振り返りて、怪しき人物に油斷ならず、反を打ッて衝と戻れば、傳次退つて兩手を上げ、いえ、大事無い者でえす。早い話が此方様にぞつこん惚れた男がござる。家田畠は無けれども養子にしたいと強い執心、何と肯いては下さるまいか。さて〳〵希有ないひがかり、我を所望といふは誰ぞ？ 今此方様が回向を呉れた墓の下なる夫婦でえすわ。やあ、汝狐狸の類で無きか、人を遊んで奇怪な。と權幕變りて鯉口にれば、ちやつと押へて大盤石、まあ〳〵わけを聞いて下せえ。

十七年の昔なり。石村五兵衛といへる分限者、利を以て愚民に誑はし、長谷八ヶ村の田地を擧げて不相應の高價にて悉皆買はんと言出したり。村人利慾に眼が眩み、二ツ返事で應といふを、地の住人刀鍛冶其名は、と言ひつゝ傳次件の墓を差し示しつ。卯之助寄ッてつく〳〵見るに法名の下に細字あり、俗名銳鋒利平三十七、同人妻渚二十三。譚は聞いた長谷の義民、名は豫て慕うたり、様子ありげな言葉の端しなに因らば跡取らむ。委しく聞かせよ。されば其事。此佛、驚く事一方ならず、子孫百代相傳すべき大冥福の田地田畠、榮華を一代に縮んとて何條賣ることやある、と手に唾して發奮し、大義を説きて諭しければ、村人目が覺め、非を悟り、十中の八九心を

ば變へ終ぬ。石村目算喰違ひ、これ皆利平が爲せる業と、惡み嫉むこと甚しく、佞人輩の常慣にて、目上に取り入る妙術あれば、當國の太守が執權、岩永といふ奸物に賄賂して、何卒利平を押片附下さるまいか、一旦二の足踏みたれど、根が愚直なる百姓輩、好言を以て欺き、八ヶ村を買占めて、我持分と致す上は、渠等悉くわが小作男、重税を課し、年貢を増し、思ひの儘に苛げなば、營利は手に取つて瞬く内、儲は山分と吹込みしに、同氣相寄る岩永手を打つて恐悦し、反間苦肉の術數を以てあらぬ罪を利平に負せ、獄に下して無理往生、遂に死罪に行ひぬ。

傳次鋭き目に涙、瞑つて空を仰ぎけり。突立つたる卯之助下に居つ、些細の事にも激し易き、血氣鬱勃せる年頃の殊に俠なる生得、瞬もせず聞き居たり。傳次やうく言をつぎ、偕此の妙烈大姊といふは、利平が内儀無雙の烈婦、岩永飽迄殘忍にて、留守の間へ捕吏を向け、渚を引立行かんとき、時は丁度御内儀が豫て娠める左腹、産の氣つかれし折なりしかば、恥かしき身を見られまいと、自殺して果られし、と皆人語り傳ふれど、生落されたる子の行方知るものは更に無かりき。

かく御夫婦が御最期も、素は皆我等の爲。それと思はず其後に又もや石村の望に従ひ、有らゆる田地を賣渡せる、罰は天か當時の難澁、愈々切なくなるにつけ、始めて神よ佛様よ、と崇むる今は世に亡き人。此傳次幼少より、餓鬼の大將やんちや者、破落漢夥間で賣出して、ちツとは人

に立てられて、名主であらうが、庄屋であらうが、糸瓜とも思はぬ身が、鍛冶の伯父様に心から惚れ、叱られては謝言りました。其人死んで家退轉、仕返しを仕度けれど、何を言ふにも手強い對手、其上傳次が采配ぢや、根から埒が明きやせぬ。遺形見の子は無くとも、志を嗣ぐに足る、好き養子は無いことか、とやうく探し當てた高妙寺のお若衆様、此骸骨は、と傳次異體な者を差出して、銳鎌利平が昔の生首。梟木に懸けられて、由井が濱の鹽風に吹曝されし白髑髏、今いふ通りの履歷なれば、譬へ赤の他人にても、親として恥かしからず。なれども子となるに恥ぢざるものは、此方を置いて外に無し。名家の跡を絶さじ。と思ひ入つたる傳次の赤心、お氣に入つたらなんと此方様、養子になつては下さるまいか。お、發奮たる言分面白し、傳次媒頼んだ。と草折敷きて行儀を正せば、傳次手を拍ち、目出たいな。鍛冶の叔父さん。三國一の子が出來た。と生たる人にいふごとく、其白髑髏を伏拜みぬ。

四

村名主の六右衛門、表口にのつさりと差合繰らぬ胴謾聲、婆様内にか。六右衛門ぢや、御意得ましよ。と音訪へば、親娘取膳の箸を止め、あい、居ります。誰方、お這入りなされませ。そんなら御免。と提灯消し、裳はたきて、つか／＼通る。

膳押片付け手をつきつゝ、これは名主様、お出。夜に入つて急用か、小萩や、お茶を。あい、

あい。と口輕に埃拭つて乗せて出す盆ごと取りてぐつと干し、あちや、あちや、これは好いお茶

頂けます。おたい煎れ人が別嬪ぢやて、澁かろか知らねども、とんと頬枡がちぎれやす。甘露甘

露、と騒々し。見れば麻の上下扮装、ほ、ほ、名主様本式ぢやの。葬禮の歸りかえ。ぷう滅相な、

鶴龜々々。鶴と龜とが婚禮の媒妁役ぢや、やあ、若い者其品これへ。と差圖の下。

壽留女、來舞布、家内喜多留、末廣に偕白髮、千疋包みに水引掛け、目録添へて恭しく目出度

目出度と、二三人門口より持込めば、小萩も母も興覺顔。

其處へ直せば用濟だ、歸れ。と歸らせて、六右衛門座を正し、結納の驗迄、目録お目に懸

けます。幾久敷御受納被下べく候。とのべつに饒舌りてけろりとする。母親は屹となり、襟搔

合せて膝押進め、聞けば、行逢橋邊に、末社が轉業するさうな。名主様魅入れてかいな、お笑止

や。家内に娘は居りますれど、縁組みした覺ござりませぬ。門違か、と遣込むれば、肩をゆつて

打笑ひ、うむはゝゝ、咽喉から手を出すほど嬉しがつて居りながら、いやさて、大層な勿體ぶり、

今更めて婿殿をいうて聞かすが、振附くな。雪の下の白銀と名に轟いた石村様、御祕藏の一粒息

子、岩永様に奉公なされて、滅法な御氣に入り、祿高は千五百石、石村次郎藏といふ御方、どう

した風の吹廻しか、御縁組遊ばさるゝ、媒妁は誰あらう、長谷村名主六右衛門。と扇で膝を叩き